

中国の新劇と京都

——任天知・進化団と静岡小次郎一派の明治座興行

陳 凌 虹

はじめに

中国における新劇は一九世紀末に古典演劇を継承しながら、もう一方で近代劇の影響を受けて、両者の交錯作用のうえに作り出された演劇様式であり、中国の現代演劇^①＝話劇^②の誕生を促した演劇様式でもある。当時は文明戯、後には早期話劇とも呼ばれた^③。

新劇の発祥と発展の歴史を遡ると、日本との深いつながりに気づく。とりわけ、一九〇六年に東京で創立された中国最初の新劇劇団である春柳社^④は、日本演劇界の養分を吸収したため、同時代の他の演劇団体に比して上演形態、舞台美術などの面においてより近代的な演劇理念を見せていたとして高い評価を得ている。春柳社が創立された一九〇六年前後、すなわち明治四〇年代は新派^⑤が東京でその全盛期といわれる「本郷座時代」を迎えた時期である。当時繰り返し

し上演されていた『不如帰』、『金色夜叉』、『乳姉妹』、『雲の響』、『潮』などの家庭・社会劇は、そのまま留学生によって翻案・上演され、中国の劇壇に多大なるエネルギーを注ぎ込んだのである^⑥。

それゆえ、新劇と日本のかかわりを語るとなると、東京に目を向けがちになる。しかし、小論では新しい資料に基づいて、「文明戯を一つの劇種として確立させた」^⑦重要な劇団である進化団の創立者・任天知（一八七〇？～？）と京都の関係を探求する。それにより、今まで曖昧にしか語られてこなかった任天知の日本での経歴を明らかにし、そして当時の京都新演劇界の様相を提示し、演目の比較を通じて、任天知と京都の新派との間にどれぐらいのつながりがあったのかを検討し、任天知の日本滞在が彼の後の演劇活動にどのような影響を与えたかを探る。

一、任天知について

清末民初、新劇に従事する演劇人の多くはその出自が今日なお謎のままである。原因は彼らがそもそも演劇とは関係のない所謂「革命鼓吹者」であり、本名や経歴を明らかにしたがない一面があること、加えて劇団を興した後も、一方で革命宣伝のために演劇をするが、もう一方で商業演劇の形を取って、観客の目を奪うために、自己の出自を大げさに飾る傾向があることによる。任天知もその典型人物の一人である。

従来の研究は主に『新劇史』(朱双雲、一九一四年八月、新劇小説社)、『鞠部叢刊』(一九一八年一月、上海交通図書館)などの同時代の刊行物と欧陽予倩「談文明戲」(『中国話劇運動五十年史料集』第一輯、中国戲劇出版社、一九五八年)、徐半梅『話劇創始期回憶録』(中国戲劇出版社、一九五七年)、朱双雲『初期職業話劇史料』(一九四二年六月、重慶独立出版社)などに依拠してきた。それらが記す任天知の人物像は次のようなものである。

『新劇史』・「天知本紀」

天知は満州人であり、台湾籍である。劇の多くは意気軒昂で、世を憤るものである。天知派の名を持って知られている。演劇人の多くはその門下生である。⁹⁾

『鞠部叢刊』・「俳優軼事・新劇家現形記」

任天知、元の名は文毅、長白山の人で、新劇界唯一の法螺吹きだ。上海に来たのは光緒末年で、孝欽皇后那拉氏の私生児と自称する。(中略)一ヶ月後、上海に戻り、日本国籍を取得して、藤堂調梅という名を持つ。庚戌年「一九一〇年」、進化団を創立、広く弟子を募集し、天知派を号して長江地域で勢力を広めた。

『初期職業話劇史料』・「軼始職業話劇的進化団」

天知の家柄については人によって説が違ふ。台湾人だとか、満州人だとか言われるが、彼自身は西太后の私生児だと宣伝している。私個人の観察では、北方人で、日本に行ったことがあり、日本籍に入った可能性もある。それゆえ、藤堂調梅と名乗る時もある。

これら三つの資料からも分かるように、任天知の出自に関しては風説の数々があり、いずれも定説となるものではない。最近の研究は『民立報』、『申報』等の記事に基づいており、それらが示す任天知は次のようである。

『民立報』・「進化団人物誌」一九一一年八月五日

首領の任文毅は年齢は四十一歳、原籍は北京の鑲黄旗であり、漢軍二甲に属し、喇宝常佐領の配下であったが、現在は日本台湾に籍を置いている。

『申報』・「新優任文毅之歴史譚」一九二一年八月一七日

任文毅は、北京の鑲黄旗人であり、漢軍二甲に属し、喇宝常佐領の配下である。後、台湾に移り、日本籍に入り、藤堂調梅の名を持つ。日本西京政法大学において講師を勤めたことがある。光緒三十一年に北京に入り、革命党と疑われて逮捕されたが日本大使館より保釈された。

また、これまで演劇研究の分野では注目されてこなかった資料に、彭翼仲の自伝『彭翼仲五十年歴史』^[1]があり、任天知の人となり伝えてくれる。任天知が一九〇五年に日本から帰国して、上海、天津を経由して北京に到着し、当時有名なジャーナリスト彭翼仲（一八六四―一九二二）^[2]の新聞社で翻訳の仕事をしているときに、孫文に間違えられ「孫文入京」の騒ぎまで起こしたというのである。この彭翼仲の自伝『彭翼仲五十年歴史』は任天知の経歴を彼自らの話として詳細に記している。

（任天知が）曰く「本姓は任、名は文毅、北京漢軍旗人。幼

時に山東出身の義父に従い鎮江へ商売に赴く。義父の長男が成長して馬が合わず出奔する。福建省に到達。時は甲午（光緒二〇年、一八九四年）台湾の役、孔副将の部下に投じ、台湾に赴く。台湾が割譲された後、大陸に渡る力がなかった。『約』に則って二年後日本籍に入り、日本台南人になる。北京語が堪能であるため、西京に招聘され、清語学校教員になり、藤堂氏に婿入りする。日本の習慣によると、婿入りすれば家業を受け継ぐ。藤堂と名乗った所以である」^[3]

これによって、「謎の人物」と思われてきた任天知の素性がほぼ明らかになったといえる。ただ、新劇と日本の関わりを考える際、言うまでもなく任天知の日本滞在は重要な意味をもっている。にもかかわらず、例えば任天知の演劇活動と日本の関係を論じる代表的な論考である『中国早期話劇與日本』・「進化団與日本新派劇」^[4]も、任氏の演劇を壮士・書生芝居時代の新派、すなわち化粧演説、政治宣伝という全体的な流れに結びつけ、そこに触発されたという漠然とした「影響論」に留まっている。それだけでは時代の全体像は窺えても、一人個人としての任氏は見えてこない。従って、小論では任氏が日本滞在中にどのような活動をし、どんな演劇を観たか、すなわち彼の日本体験を掘り下げることにより、その体験が彼の演劇活動にどのような影響を与えたのかを検討していく。

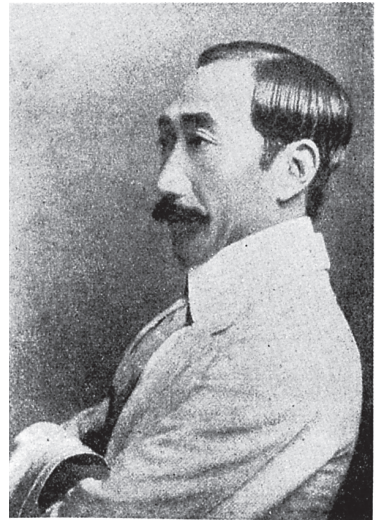


図1 任天知

(『中国話劇運動五十年史料集』第一輯、中国戯劇出版社、1958年)

二、任天知と京都法政専門学校・東方語学校

先に引用した資料に、任天知が日本の「西京法政大学講師」「清語学校教員」として勤めた旨が書かれている。これを手がかりに調べると、一九〇〇年に設立された「京都法政学校」の姿が浮かび上がってくる。

明治維新の一環として日本の教育近代化はいち早く始められた。京都では一八六九年に六四の小学校が設立された。幕末に広まっていた寺子屋の初等教育が小学校に引き継がれ、また近代化されていったのである。それに対して、中・高等教育は郷校、藩校、私塾、仏教各宗派の学問所、公家の学習院によって推し進められてきたが、紆余曲折を経て、一八六九年六月に東京で大学校^⑤の開設を迎

える。京都では一八六九年二月に仮大学校が開校した。そのため、西園寺公望（一八四九～一九四〇）が一八六九年九月に創立した「私塾立命館」は翌年京都府庁（太政官留守官）の差留命令により閉鎖させられたが、西園寺の理念を受け継いで、中川小十郎（一八六六～一九四四）が一九〇〇年に京都法政学校、すなわち立命館大学の前身を設立した。一九〇三年、専門学校令により京都法政学校は「私立京都法政専門学校」に改組され、また一〇月に東方語学校を設置した。

「東方語学校設立ノ趣意」^⑥には下記のように書かれている。

今ヤ一世ノ衆目一二極東ニ注グ、列強ノ外交及貿易ノ枢機ハ殆ンド極東ノ局面ニ繫レバナリ、我邦国ヲ立テ、此間ニ在リ。我邦人タルモノ、豈晏然トシテ依々旧態ニ安スベケンヤ。邦人ノ此時ニ処スル、須ラク自カラ進ミテ、極東諸邦ノ間ニ周旋シテ、彼我ノ事情ニ疏通シ、相互ノ誤解ヲ避ケ、以テ事業ヲ興起シ、貿易ヲ振作シ、自他ノ利益ヲ図ルト共ニ、我國運ヲ発展シ、永遠ノ平和ヲ保持シテ、生民ノ福祉ヲ進ムベシ。是レ邦人ノ天職ナリ、是レ実ニ邦人ノ責任ニシテ、而シテ其權利ナリ。責任ハ以テ尽サザルベカラズ、權利ハ以テ屈スベカラズ。而シテ此責任ヲ全フシ、此權利ヲ行フノ道、彼我ノ言語文字ニ精通シ、以テ自由ニ我思想ヲ伝ヘ、十分ニ彼ノ所思ヲ明ラカニスル

ヨリ急ナルハナシ。東方語学ノ研究此ニ於テ乎、邦人ノ為メ頗ル急要ノ務タルヲ見ル、本校ノ起ル誠ニ偶爾ニアラズ。乃チ本校ハ適當ノ教師ヲ招聘シ、教授ヲ懇切ニシ、語学ノ応用ニ於テ遺憾ナキヲ期シ、以テ時務ノ急ニ応セント欲ス。世上有志ノ多少時局ニ見ル所アルモノ、早ク此機ヲ逸セズ、惠然トシテ来リ学ヘ。

一九世紀末から二〇世紀初頭、日本帝国の積極的な海外拡張に備え、外国語人材を養成することが東方語学校設立の目的とされている。学校には清語科と露語科が設置され、二年制、週八時間の授業で、六時間を語学、二時間を近代史、地誌、殖民政策の講義に当て、新入生五〇名でスタートした。この清語科の中国人講師こそ正に当の任天知であった。

それでは、彼が勤務した東方語学校とはどのようなところであったのか。「東方語学校の近況」⁽¹⁷⁾は次のように語る。

京都法政専門学校内なる東方語学校は、去十月十日開校以来追々盛況に趣き、目下清語科の学生五十名、露語科の学生十名位なるが、殊に清語科の教授法は斬新なる方法に由りて、懇篤に学生に接し、講師任文毅及花岡伊之助⁽¹⁸⁾「作」氏両共に同時に教室に臨み、両々相協力して教授に従事し勉めて実力の開発と

養成を図り、其成績頗る見るべきものあり。既に此程永観堂にて観楓会を兼ねて、会話の演習をなしたる程にて、其成績に對し、校の内外共好評噴々たりと云ふ。

東方語学校は早速「日清戦後の帝国主義的な対外膨張政策のもとで、アジアの天地を夢みる青年たち」⁽¹⁹⁾を組織した。世上の好評につき、入学志望者が増加し続け、まもなく学級を増加させる⁽²⁰⁾。任天知は北京出身の満州人で北京語が堪能なため、清語科講師としては適役であったと思われる。彼が東方語学校に勤める前後の経緯については、『京都日出新聞』の「清語教授の昨今」⁽²¹⁾と題する記事に詳しい。

京都に於ける清国語教授は最初「一九〇二年」柳馬場押小路上の町に清語講習所を設置し、清国人任文毅を雇入れ、講習を開始し、又一昨三十六年「一九〇三年」十月より、京都法政大学内に東方語学校の設立あり。右任文毅をして、之れが教授の任に当らしむることとし。同語学の大成を目的とし経営する処ありしに、昨年「一九〇四年」の冬に至り、茲に又東方書院の設立を見るに至り。西陣並に四条寺町の二ヶ所が授業を開始し、入学者の便宜を計ることとし、其速成を鼓吹したるに、一時は多少の入学者を見るに至りたり。然るに、本年三月馬淵某、三条通り新町に清語学会を設立し、大に其の速成を鼓吹し、

且つ教員としては清国人郝廉増なるものを招聘せしが、郝は東方語学校に關係ある花岡伊之作氏が昨年清国より同伴せしものにて、同人は日本に來り勉強の志を有したるに、昨年の冬設立したる東方書院、西陣・四条寺町に設立せしは、花岡及野村某の経営に係りたるを以て、郝は三箇所に教鞭を採ることとなりたるより、(中略)郝は此際前記二箇所の教師たることを辞し、京都法政大学内に於ける東方語学校の専任清語教師となり、傍ら法政大学に於て法学を修むることとなりたれば、郝は此の厚意酬ゆる為め、専心同校に於ける清語の教師なるを誓ひたりと。然るに、清語講習所に於ける教師任文毅は其の性行甚だ面白からず、世間に種々の風評ありたる人物なるが、過半突然帰国せしを以て、同講習所は其の担任教師を失ひ、授業に差支を生ずるに至りたれば、本月中前記の郝氏に於て、其の依頼に應ずるよしなるが、右講習所の外、東方書院清語講習会の如きは既に其の教師を失ひたることとて、速成は実質上無効なることは認められたるより、自然消滅の有様となりたり。因みに法政大学内に於ける東方語学校は来一日より授業開始し、斯学の大成を期すべし。

この報道から読み取ることができるのは、任天知が一九〇二年頃

から「東亜同文会京都支部」の清語講習所講師を勤め、そして一九〇三年一〇月に京都法政専門学校・東方語学校講師になったこと、彼以外に清人郝廉増が一九〇四年九月に東方語学校の清語速成科、一九〇四年冬に東方書院、一九〇五年三月に清語学会の講師を歴任して、一九〇五年九月から東方語学校専任講師となったことである。郝廉増が東方語学校専任講師になったのは、勿論任天知が突然清語講習所と東方語学校の講師をやめ、帰国したためである。「其の性行甚だ面白からず、世間に種々の風評ありたる人物なるが」というのは、やはり彼の複雑な経歴に依拠しているのであろう。

ここで、任天知が帰国することになる原因について考察する。

一九〇五年前後の日本は日露戦争の勃発など、ナショナリズムが膨張する時代であった。例えば一九〇四年二月八日付の『萬朝報』には「京都市の法政学校東邦語学校生徒数百名は五日夜提灯行列を為し、壮烈なる軍歌を高唱しつつ、阿弥陀ヶ峰の豊大閣廟に登り、徹宵大爆竹をなせり」という記事が見られ、同年二月一三日の『日出新聞』には「京都東方語学校清語科及露語科の生徒中には今回の事変に際し、従軍『通訳』の件に付き、続々其筋へ出願するもの多き由」とも報道されており、東方語学校に漲る生徒の緊張と情熱がそのまま伝わってくる。

また、東方語学校清語科は独自の教科書『清語読本』を編集している。「今や王師の向ふ所、朽を摧くが如く海に陸に着々勝利を博

して、正に世界環視の間にありこの洵に志士踴躍事に従ふの秋なり、而して今日の軍政、民政に従ふもの固より論ずるを須ひず他日新占領地に於て商工其他の事業に従ひ国運の推広に努め進て膨張的国民の本領を完ふせんと欲せば勢、彼土の語音に通せざる可からず是本書の著ある所以なり乞ふ一本を坐右に備へよ」⁽²⁾との広告文に、帝国の海外進出を応援する姿勢が赤裸々に語られている。この教科書には以下のような例文が載せられている。

＊你們好好聽、這回敵國和俄國開仗、是因為維持世界道義的義務戰、

汝等ヨク聞ケ、此ノ度敵國ト露國ト戰カツタノハ、世界ノ道

義ヲ維持スル為メノ義戰デアル（前編）

＊洞庭湖有名是有名、可是不如琵琶湖好、

洞庭湖ハ有名ハ有名デスガ、然シ琵琶湖ノ好イノニハ及ビマ

セン（後編）⁽³⁾

前に引用した「東方語学校の近況」に「講師任文毅及花岡伊之助〔作〕氏両共に同時に教室に臨み、両々相協力して教授に従事し勉めて」いた旨が記されているが、任天知がこのような例文を教授しているいい気分になろうはずがない。

このような社会状況下において、彼はどのような気持ちで日々を

過ごしていたのであろうか。『彭翼仲五十年歴史』に当時の彼の心情が綴られている。

日露戦争で敵艦隊が沈没したとの勝報が西京に伝わると、国を挙げて狂った。寝ているところへ、万歳の歓声が潮の如く響いてくる。家内梅子が服を着て出て、拍手をして叫んだ。私は一人寢床の隅に座り、悲しんで涙を流す。日露は東北三省のため争ったが、東北三省はどちらの土地なのか。祖国が中立を守り、まさにそこを諦めたに等しい。日露両国のどっちが勝っても、中国に福をもたらさない。目前の情景に接して悲痛な思いがするばかりだった。梅子が部屋に入ってきて、「あんたは日本籍に入り日本人になったのに、どうして一人で悲しんでいるの」と聞いた。私はその故を伝えた。梅子が私のことを軽蔑して、「中国人は一向に愛国心がないが、あんただけは祖国を知っているのか」と言った。そして、夫婦が反目した。壁に掛けてある銃を取って彼女に向って、死を覚悟して争ったが、姑が鎮めてくれた。それをきっかけに帰国する決心をつけ、二度と日本人にならないと誓った。梅子も後悔して、私について帰国することになった。上海に着いて、気が変わるのを心配して、彼女に阿片を勧め、帰る道を絶たせた。⁽⁴⁾

任天知は東方学校ないし京都に充滿するナショナリズムに触発されて帰国に思い至ったのである。上記にもふれたが、彼が帰国したのは一九〇五年後半のことで、その後北京で「孫文入京」の騒ぎを起こしたのである。「二度と日本人にならない」と誓ったはずであったが、逮捕された任天知が日本領事館の保護を求めた時、調査で北京滞在中の清語学校・花岡氏に証人として出頭を要請することとなった。結局、任は日本領事館に保護された後、日本に戻らざるをえなくなる。時は一九〇六年九月前後であった。彼はその後も反政府の演説や演劇活動を行い、警察に干渉された場合、日本国籍を切り札として活用している。

三、任天知の演劇活動と京都の新演劇

1、任天知の日本滞在と中国での演劇活動

任天知が最初に演劇史において名前が現れるのは、一九〇七年六月に東京で春柳社『黒奴籬天録』（「アンクル・トムの小屋」）の上演を観て、社員一同に帰国上演を勧めたが拒否され、一人で上海へ帰った、という記述である。⁽²⁵⁾しかし、彼が演劇に目覚めたのはもっと前だと思う。すなわち上に述べた一九〇五年末～一九〇六年八月の中国滞在中だった。『彭翼仲五十年歴史』によると、任は上海に着いた後、端方（一八六一～一九一一）の謁見を求めようとしたが、端方は既に清政府の派遣で「出洋考察憲政」の五大臣の一人として

日本、アメリカ、イギリス、ロシアなどの一〇ヶ国を視察中（一九〇五年二月～一九〇六年八月）で、会えなかった。すると親交のある名優汪笑儂⁽²⁶⁾の紹介で、端の護衛である夏鳴皋を知る。夏はもともと演劇界の人で、彼を通して任は北京で名優田際雲⁽²⁷⁾を知ったという。

以上をまとめると、任は日本のナショナリズムに触発されて、「日露は東北三省のため争ったが、東北三省はどちらの土地なのか」と奮起して帰国し、自分の情熱を直接政府に訴えようとする中、改良京劇に取り組む名優たちを知った。演劇界と人脈を持つようになり、民衆教育と革命宣伝には「新聞より演説、演説より演劇」と目覚めていったのである。そこで、日本に戻ることにになり、一九〇六年八月～一九〇七年六月の日本滞在中に新派や、春柳社の上演を観たのであろう。

さて、彼の名前が再び演劇史に現れたのは一九〇八年五月頃である。春柳社の影響を受けて上海では王鐘声（一八七四？～一九一一）⁽²⁸⁾が一九〇七年九月二日に春陽社⁽²⁹⁾を組織し、二月四日～六日に『黒奴籬天録』を上演した。そして一九〇八年三月、王鐘声は俳優養成の通鑑学校を設立し、五月に幕と写実の舞台背景を駆使して『迦茵小伝』を上演した。これは中国最初の話劇⁽³⁰⁾と言われた。任天知はこの辺の上演活動に参加していた。その後、王鐘声は杭州と上海の間を行き来し、一九〇九年四月から天津・北京へ北上し、一方、任は消息を絶つてしまう。しかし、一九一〇年十一月、任は突然上海の

新聞に俳優募集の広告を出して、進化団を組織する。一九一一年二月八日～五月にかけて、進化団は南京・昇平戲院において上演活動を行った。出し物は『血蓑衣』、『東亜風雲』、『新茶花』などである。

五月には蕪湖、六、七月には九江、漢口など各地で清政府の取締りにあい、七月二五日に上海に戻った。辛亥革命後、二月三〇日に、

進化団が東南光復紀念会演で『赤血黄金』を出し、一九一二年四月四日～六月二日、新新舞台で「天知派改良劇」と銘打って常打ちを続けた。初日の演目は『尚武鑑』である。一九二二年六月以降、寧波、蕪湖、揚州を転々としたが、まもなく解散した。

「進化団新新舞台上演演目一覧³¹⁾」に見える演目の中で、辛亥革命と尚武精神を謳歌するのが『尚武鑑』、『新黄鶴楼』、『共和万歳』、『情仇』(『黄金赤血』)であり、女性的美徳、激動する時代と封建的な通念に翻弄される男女を描くのが『新茶花』、『侠女伝』(『血蓑衣』)、『情恨天』(『恨海』)、『同命鴛鴦』(『血淚碑』)であり、社会悪を暴露するのが『黒籍怨魂』、『血淚碑』などである。今、台本の形として遺されているのは『新黄鶴楼』、『共和万歳』、『黄金赤血』、『恨海』であり、前三者は進化団の代表演目とされている。これらを一読して一目瞭然なのは、進化団の演劇の随所に長い演説が差し込まれていることである。革命宣伝のために演劇を始めた任天知及びその一派の出発点が窺える。この種の「化粧演説」、「政治宣伝」は壮士芝居、書生芝居時代の新派³²⁾と共通する特徴で、新派を手本にしているとき

れる。

これまでの記述に基づいて、任天知の日本滞在期間及び中国での演劇活動を整理すると、概ね下記の通りである。なお、○は日本における行動・活動であり、△は中国における演劇活動である。

○一九〇二年～一九〇五年末

京都法政専門学校東方語学校等で中国語講師を担当

△一九〇五年末～一九〇六年八月

上海で汪笑儂、北京で田際雲など、改良京劇に取り組む名優を知る。

○一九〇六年八月～一九〇七年六月

東京で春柳社上演を観る。

△一九〇七年九月～一九〇八年

上海で王鐘声の演劇活動に参加。

○一九〇八年～一九一〇年

京都滞在？

△一九一〇年～一九一一年後半

北京で王鐘声の演劇を観る。³³⁾その後、上海で進化団を組織し、新劇を確立。

この期間、任天知は繰り返し日中間を往復していたと思われる。

さて、任天知が新劇に接したと思われるこの時期の京都演劇界は、どのような様相を呈していたのであろうか。次はこのことについて考察する。

2、静間小次郎と京都の新演劇

一九一〇年代、京都の新演劇は静間小次郎一派に支配されていた、と言っても過言ではない状況であった。静間小次郎（一八六八～一九四〇）は一八六八年七月一日に山口県岩国町に生まれ、通学の傍ら、漢学を勉強した。一八八四年（一六歳）、陸軍士官学校を受験したが入試に失敗し、京都へ来て小学校教師、巡査を勤めた。一八九〇年（二三歳）、東京に行つて、壮士の仲間に入り、政談演説や選挙運動に熱中した。一八九二年（二四歳）に川上一座に入るが、後に金銭問題から川上一座を離れ、一八九四年に木村周平、金泉丑太郎と京都で「三友会」を組織し、新聞小説の脚色を主な演目に歌舞伎座で開演したが、まもなく解散。その後、すし屋を営んだがうまくいかず、一八九六年末、再び俳優の鑑札を受けて福井茂兵衛一座とともに東上。川上座への再出演、大阪朝日座を経て、一八九八年に一座を組んで、各地で巡演した後、京都明治座に落ち着き、常打ちを続けた。³⁴一九〇二年一月、白井松次郎、大谷竹次郎が常盤座を明治座と改称して、松竹合名社を興す。一九〇九年までは「毎月のごとく静間静間で、京都の大衆に静間演劇の名で親しま



図2 静間小次郎（『演芸画報』1938年7月号）

れ、それにつれて松竹——最初はマツタケと呼んでいた——も勢力を強めていた³⁵。このように、静間は京都新派の開拓者であり確立者でもある。

また特筆すべきは、静間の参与で一九〇二年四月二六日に京都演劇改良会が発会されたことである。この会は演劇改良を目的としており、京都の知識人、俳優、興行人、財界、官界が一体になって組織されていた。会長は京都電鉄の創始者高本文平（一八四三～一九一〇）で、白井松次郎（一八七七～一九五一）、大谷竹次郎（一八四三～一九六九）、高安月郊（一八六九～一九四四）らが名を連ねている。この会は日本における『リア王』、『タルチュフ』の初上演を成功させており、「同趣旨の会は明治一九年の演劇改良会以下種々あったが、それらすべてが竜頭蛇尾に終わったのに対し、当初から劇界関

係者が中心部にいたこの会は、ある程度の実績を上げたのが特色である⁽³⁶⁾」とその功績が評価されている。

このように、演劇改良が実行されていた京都において、静間一座はどのような演目を出していただろう。一九〇二～一九一〇年の静間小次郎明治座興行年表を作成すると、巻末付録の表のようになる。一目して分かるのは、静間一座の演目の大部分は新聞小説の脚色物、時事物、講談物、探偵物であり、これらいずれも当時の新派が好んで取り上げるテーマであった、ということである。その他に、日露戦争のあった一九〇四年～一九〇五年には、日露戦争劇の上演も目立っており、下記のとおりである。

一九〇四年

二月二七日～三月一五日 『日露戦争号外』(三月に静間が川上と

戦地視察)

三月二〇日～四月七日 『日露戦争』

四月一四日～五月三〇日 『戦雲余瀆』

五月八日～二六日 『鬼中佐』

五月三一日～六月一八日 『名誉乃三八』

六月二三日～七月九日 『敵見方』

七月一四日～八月一日 『軍国の華』

八月六日～二五日 『梅千一ツ』

九月一日～一九日 『栄華の塵』

九月二一日～二五日 『大和武士』

一九〇五年

一月一〇日～一九日 『天の祐』、『旅順口』

一月二〇日～二二日 『旅順陥落祝捷劇』、『旅順の開城』

川上音二郎(一八六四～一九一三)は日清戦争劇によって歌舞伎の牙城である歌舞伎座に進出し、新演劇の名を世間に知らしめた。日清戦争劇ほどではないが日露戦争時も「何時もの戦争芝居にて筋も何も通らず只ばちばちどんどん大砲や小銃の音のみなれど如此ものが時世に適して、非常に呼びものとなるなり」⁽³⁷⁾、「時局の影響を受けたる事、殆ど廓然なり。明治座の静間派は、開戦以来戦争芝居を打続けたる為め常に好人気にて左程の打撃を受けざりし」⁽³⁸⁾などの報道からわかるように、相変わらず戦争劇の人気ぶりを垣間見ることができ。

静間小次郎は脚本選択の苦心談を次のように語っている。

その当時は未だ観客の趣味がそれだけ高尚でムいませんから折角上場しても受けません、一方劇の方を成効させようとすれば必ず人気を落す、従って仕打の御機嫌を害ふと云ふ仕儀でこの矛盾には実に閉口しました。そこで可成両者の調和を図る為

めに所謂趣味あるものと、俗受けを主とせる無趣味なものとを折衷し、観客の劇観が進むに従ひ次第に後者を減じて前者を採用する方針を取りましたので、悪落ちのすることなく知らず／＼進歩して今日では昔日に比して雲泥の差がムいます、（中略）

私が文学趣味の小説や新聞三面の際物、面白き講談ものや探偵小説など、苟も登場し得られそうなものは悉く素読して広く材料を蒐集め、それを脚色み口立て座員に荒筋を話すと各々自分の白を写し得って覚えると云ふ遣り方でした、（中略）漸く五年程前に並木君を招聘してからは一方に完全なる作者が出来、一方には狂言の数を減ずると云ふことになりまして初めて狂言も選択して趣味あるものを演じ、稽古も規則正しく遣って役者もそれ／＼工夫をするやうになったのです。左様今日ではまず年十二回位の興行でしやう。当初は随分苦しみましたよ、⁽³⁹⁾

十年以上の常打ちが続けられたのはやはりその狂言の選択にあり、京都観客の好みをよくつかんだことが要因であろう。興行面においても静間が入場券制、脚本尊重、劇場の衛生、茶屋制度など常に改良の配慮を怠らなかつたため、知識人や京大生の観客も多かった。京都で唯一新演劇を常打ちする明治座が南座、歌舞伎座と並んで一等劇場のランクに据えられたという事実が、明治座の地位を物

語っている。

四、静間一派の演目と天知派の演目

進化団のレパトリーには日本の作品から重訳したものが二つある。『血蓑衣』と『尚武鑑』である。飯塚容氏は『血蓑衣』は村井弦斎『両美人』の翻案である」と指摘し、その変容を詳細に考証した。また日本では一九〇八年五月三十一日に静間一派によって舞台化されたと言及し、「静間一派の出し物では日露戦争劇『鬼中佐』が『尚武鑑』と名を変えて、進化団のレパトリーになっている。『血蓑衣』もまず進化団の演目になっていることからすると、何か因縁を感じさせる⁽⁴⁰⁾と述べている。つまりこの二つの演目は進化団に先立って、他の新派劇団でもない静間一派によって上演されていたことから、両者の間に何かつながりがあるのではないかと示唆している。本論の前半では、今まで知られていなかった任天知の京都滞在が確かな事実であることを検証した。そこで、任天知は京都に滞在していたため、衆目を集めた静間一派の明治座公演『鬼中佐』（一九〇四年五月八日―二六日）と『両美人』（一九〇八年五月三二日―六月一七日）を彼が観た可能性がかなり高いという推測が成り立つわけである。が、実際はどうであったのだろうか。任天知と静間一派とのつながりがいかなるものなのかを、二つの演目を通して考察しよう。

一、『鬼中佐』、『鬼士官』と『尚武鑑』

『鬼中佐』は一九〇四年五月八・二六日に静間小次郎一派が京都明治座で上演した作品で、山口霧汀による脚色で、五月四・七日、『京都日出新聞』に荒筋が紹介されている。要約すると以下の通りである。

序幕

東京。陸軍歩兵少尉鈴木清とその仲間が集まり、海軍少尉白瀬猛夫が横からの喧嘩を制止し、盗心を起こした同郷を改心させるが、鈴木清の妹・園江との縁談に対し、「破顔一笑軍人には妻は必要ですとの一言の下に拒絶す」。

二幕

二千里外の露京で露国海軍少将グロンボイが正實白瀬猛夫のため宴会を行う。グロンボイが三人の令嬢の内一人を猛夫の妻に送ると言うが猛夫は断る。露国紳士の要望で日本の舞踏女優四人が支那人黄漢明に従い登場。その中で、鈴木清の妹・蕙江を発見する。猛夫が金を与えて日本へ帰らせようとするが、蕙江と黄漢明がこの金を資本に東露西亜に行こうと図る。

三幕

清韓の境なる鴨緑江で蕙江と黄漢明が悪事をなしつつ、入ってきた日本の国事探偵を縛って強盗をなすが、「日本人、支那人の天職を語る」のを聞いて蕙江が元來武士の娘と悟り、黄漢明を殺し、探偵を逃す。探偵が露兵に射撃さ

れ、蕙江に密書を渡す。

四幕

猛夫・白瀬少佐が旅順第二回閉塞事業に採用されるのを喜び、平素酒嫌いな白瀬にあらう壮行の盃を飲み干す。征露の軍を率いる鈴木中佐が鴨緑江を越え野営を張るが、中佐の妹・蕙江が密書を持ってきて、兄に罪を謝る。

五幕

白瀬少佐が指揮する福井丸は決死の士を乗せ、敵の探海燈に照らされても尚目的海点に進む。遂に白瀬少佐が「一片の肉となって忠魂永く青史に伝へらる 聖上之れを聞し召し中佐を送り給ふこれ全く鬼中佐と歌はるゝ所」。

戦闘場面を披露し、軍人の忠魂を称揚する典型的な戦争劇である。

上演状況について、新聞では「又新京極通は各興行席を始め各商家は陸海軍旗を釣り提灯を列ね大に景気を添へたるが通行は非常に混雑なりし」、「明治座の静間派一座の新演劇は昨日初日開場せり午後三時より入場券を売り出す筈なるも一時頃より入場者は我れ一と切符売口前列を為して詰掛け好人氣なりし」⁽⁴⁾、「同座にて静間の鬼中佐が下髯は近寄れば寄る程本物に見ゆるが右は静間の工夫にて毛屑をニスにて貼け居るが故なり」⁽⁵⁾と評されている。『鬼中佐』は日露戦争に乗じてもてはやされていたことが分かる。

一九一二年四月四日、任天知・進化団が上海新新舞台で最初に取り上げたのは『尚武鑑』であった。初日の演目について、『血蓑衣』

か『尚武鑑』か社員の意見が不一致なままであったが、「尚武鑑」の服装は新しく調達した和服で、これを用いることにより観客の耳目を一新できる。血蓑衣では天知は辛玉潔を演じるが、これは非常に苦勞する役柄であり、手間を省くため⁽⁴⁴⁾に『尚武鑑』に決定したという。

新新舞台の興行方法は当時上海の商業劇場と同様で、平日は夜の部、休日は昼の部と夜の部が設けられている⁽⁴⁵⁾。進化団は夜の部に入るが、京劇の後の出番となるので、京劇俳優の故意の遅延により、初舞台は散々な失敗に終わった。というのは、京劇が終わるのが一時二五分であるが、一二時以降の上演は禁止されているため、残りはわずか三五分しかない。『尚武鑑』は二幕の構成だから、第三幕と第五幕の前半しか演じられず、台詞を述べ終わらないままに、突然幕が閉じることとなった。その上、社内において意見対立があつて有力メンバーが主役を勤めず、精彩を欠くこととなった。和服を着用することにより観客の耳目を集める算段であつたが、着慣れない衣裳であるために思うように演じられないありさまであつた。不満を感じた観客は蜜柑の皮やバナナを舞台に投げ、大騒ぎになったという⁽⁴⁶⁾。このような状態だったので、新聞に劇評が出ておらず、上演台本も残されていないため、『尚武鑑』の内容を把握することができない。が、幸いにも『太平洋報』の一九一二年四月八日号に李叔同が書いた舞台スケッチ(図3)が載せられており、配役

も付されているため、参考とすることができる。

スケッチのタイトルは「新新舞台第一次所演新戯鬼士官之印象」で、「黄喃喃の露国軍長官」「範天声の智恵子」という配役である。前にふれたように、『尚武鑑』は静間一派の日露戦争劇『鬼中佐』からきたという意見がある。一方、『初期職業話劇史料』では「尚武鑑即ち日本小説鬼士官のこと」と記述している⁽⁴⁸⁾。『鬼士官』は小栗風葉(一八七五―一九二六)の小説で、一九〇五年六月に青木嵩



図3 新新舞台・進化団舞台スケッチ1
(『太平洋報』1912年4月2日)

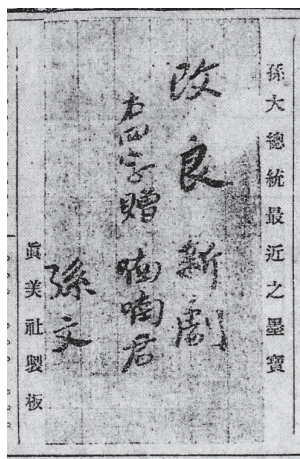


図4 孫文の題字
(『太平洋報』1912年4月8日)

山堂から単行本として刊行された。この小説は一九〇七年一月に「写情小説」の副題が付されているが、同じ題名で人物名と地名も忠実に翻訳され、商務印書館説部叢書初集第九四編として出版されている。ストーリーを簡単に紹介すると次のようになる。

海軍中将男爵島海重輝の令嬢智恵子は海軍大尉村田誠一と近々結婚式を挙げる予定だが、日露談判が決裂して開戦となる。無事に凱旋すれば挙式すると約束して村田は戦場に向う。智恵子の美貌を慕う権藤碌郎が智恵子を誘い出し、二人が密会しているように村田の母親に見せかけた。その誤解で縁談が破談となる。一方、ロシア海軍の根城旅順港を封鎖した日本軍は死傷者を減らすため、命を冒して敵の降服を説得する。この任務を果たしたのが村田である。村田が頭部に負傷して佐世保海軍医院に送られる。事情を知った智恵子は一人で佐世保に向う。村田の看病をし、薬に毒を入れる犯人を発見する。それは権藤の陰謀であると分かり、誤解を解く。勲章をもらい子爵に昇進、日比谷公園に銅像が建てられる鬼士官村田が智恵子と幸せに結ばれる。

この小説は小栗風葉の作品の中では再版もなく、ほとんど無名と言ってよい。日露戦争を時代背景に華族の恋愛、結婚、家庭をない

交ぜにした、明治期家庭小説の旧套を脱しない作品である。ハッピーエンドを除いて、戦争場面の描写や物語の設定は『不如帰』の趣を感じさせる。新派による舞台化の記録は見られない。

以上のことから、静間一派の『鬼中佐』は『鬼士官』とはまったく別個の作品で、進化団の『尚武鑑』は『鬼中佐』ではなく、『鬼士官』を下敷にしていると分かる。

『尚武鑑』で主人公を演じた黄喃喃（一八八三―一九七二）は、本名は輔周、字は二南或いは二難。直隸の名門に生れ、一九〇五年九月―一九〇八年に東京美術学校の西洋画科に留学している。春柳者創始者の李叔同、曾孝谷より一年早い入学で、美術学校最初の中国人留学生である。春柳社の東京における第二回目の上演『黒奴籲天録』（『アンクルトムの小屋』）でシエルビー、大山君子、兵士という三つの役に扮して、当時の劇評家から多くの賛辞が与えられた⁴⁹。帰国後、一九一二年に進化団新新舞台の興行に参加した。この時期、李叔同が上海『太平洋報』の編集を勤めており、親友のためにスケッチを描いた。黄喃喃は常に積極的に革命を宣伝し、同盟会と深くかわっている。旗揚げの当初、孫文から「改良新劇」の題字（図4）を贈られ、新新舞台の幕に飾った。しかし、「上演が始まってまもなく黄喃喃は任天知との意見の行き違いから、退団を申し入れた。退団の日、題字は孫先生から個人的にもらったものだからと外そうとしたが、任天知が同意しない。黄喃喃は役所に訴えたが、判

決が出される前に進化団は上海を離れることになり、訴訟はうやむやのうちに終わる」こととなった⁽⁵⁰⁾。おそらく黄喃喃はこの経験から新劇に愛想を尽かしたのであろう。その後は絵に専念し、北平芸術専科学校教師などを勤め、「芸林怪傑」と称される著名画家になったのである。

二、『両美人』と『血蓑衣』

『両美人』は村井弦齋（一八六三―一九二七）の小説で、一八九二年九月七日―十一月一日の『郵便報知新聞』に連載され、一八九七年六月に春陽堂から出版された。『明治大正文学全集』第一五卷（春陽堂、一九三〇年十二月）にも収録されている。次のような物語である。

自由民権運動を背景に選挙暴動で命を落した兄・民野魁のために、その妹・民野蓮が仇敵の首を取り復讐を果たす。一方長崎に住んでいる星月蓮が父を失い、東京の叔父星月潔男爵を訪ねる途中、民野蓮と出会う。裏についた血を見られた民野蓮が仇討ちのことを明かした直後、星月蓮が党派闘争の流弾に打たれて倒れる。警官がやってきたため、やむなく民野蓮は星月蓮になりすまし、東京へ向う。男爵夫婦の寵愛を受けたが、半井医学士に命を救われた星月蓮がやってきて、民野蓮を大罪人と罵る。民野蓮は警察に自首し、有期徒刑一五年が判決される。兄の親友である陸軍少尉武田勇が蓮の

ことに感動して求婚する。男爵は金銭を目当てにする星月蓮と絶縁する。

実は静間小次郎一派の脚色より一〇年ほど前の一八九七年一月に、つまり小説単行本が上梓されてまだはやほやの時期、川上一派が川上座（一八九六年六月一四日）で上演したことは筆者の調査で分かった。先に記述したように、この時はちょうど静間が再び俳優鑑札を取って川上一座に「復座して出勤⁽⁵¹⁾」していた。この舞台は劇評によると物語と登場人物がほぼ小説通りだと分かる。「余り喝采といふ程の物にハ非ねど兎に角壮士芝居のうちでハ割合に旧劇にカぶれず巧拙は先づ扱置いて何うやら新演劇独特の型といふものさへ出来かゝりし此の一座とて一見の価値ハあり⁽⁵²⁾」「此狂言の脚色ハ高尚にて勿々に面白し、舞台一面血紅で汚す残酷なる狂言とハ雲泥の相違なり、新演劇ハ総て斯様なもの許りを選びて脚色やうになさバ自然改良演劇の道中追分とも成るべし⁽⁵³⁾」と、結構な評判を得たようだ。また、「静間の武田少尉も軍人らしくて上出来なれど折々そで無言言葉が交つて釣合はず」とのこと、静間がこの『両美人』に出演したことにより、後にまた京都の明治座で取り上げたのだらう。しかし、十数年も前の作品だから、再度舞台に出すとなると、それなりに改作する必要があったようだ。

京都明治座の公演は一九〇八年五月三一日から六月一七日にかけ

て行われ、場割と略筋が『京都日出新聞』の一九〇八年五月二七日に掲載されている。

序幕 黒澤剛造殺害、筑後川落雷急処

二幕目 上野公園銅像前、根岸原山の貧家

三幕目 大槻子爵邸波瀾、業平町八軒長家

四幕目 天王寺墓地奇遇、悪事露見

大詰 大槻邸庭園解決

建部よし子は義父黒澤剛造と住んでいるが、黒澤の行動に不満を持っている。実はよし子の母が父・原山某と結婚する直前、黒澤が原山を中傷して、よし子の母と結婚し、建部家の主人となる。真相を知ったよし子の母が離縁を申し込んだが腹黒き剛造に幽閉され悶死した。剛造と甥の対話を聞いたよし子は母の仇は剛造なりと悟り、彼を毒薬で死なせた。よし子が実父に会って、また自首する覚悟で東京に向う。筑後川の畔で病苦に悩んでいる同年輩の女性に出会い、訪ねると長崎の野口三左衛門の娘でおよしといい、父の遺言により添書を持って東京にいる大槻子爵の所に行く途中だと分かる。ちょうどその時、雷雨が益々激しく、落雷でおよしに気絶してしまう。警官がやってきて、よし子が野口よしになりすまし、通りかかったハイカラ紳士・子爵夫人の甥と一緒に東上する。

略筋はここまでであるが、場割と劇評を参考に続きを補足すれば、よし子が東京で貧しい実父に会い、大槻子爵の家に入る。子爵の寵愛と自首の板挟みに苛まれる中、悪事が暴露するが、最後に解決する。劇評にこのように記されている。

村井弦齋の『両美人』を土台として、村上浪六の『八軒長屋』を巧く引つけた甘いもの、おまけに目下大流行の自然主義とやらの場があつて、観客大笑ひなり。

一体近頃の新演劇ではない明治座の狂言を見ると、長いものを短く縮めるから筋の通り難いが多いが、今度の「両美人」は割合に筋がよく通つて居る。

一九〇八年の時点で自由民権運動を背景とする原作をそのまま舞台に出しかねるとの考慮から、このようにアレンジしたのであらう。

『両美人』は中国においては一九〇六年六月に『血簍衣』（義侠小説）の題名で翻訳され、商務印書館説部叢書初集第五〇編として出版された。漢文調の原文を忠実に翻訳したものである。一九一四年四月に再版が出され、新演劇でも繰り返し上演された。『両美人』の翻案状況は、飯塚容氏前掲論文を参照して、更に川上一派、静間一派、任天知進化団の演目を加えて、以下の表になる。⁽³⁶⁾

形態	題名	出版社・出典	主要人物	特徴
原作小説	両美人	『郵便報知新聞』(1892年9月7日～11月15日) 単行本(春陽堂1897年6月)	民野魁 民野蓮 武田勇	自由民権運動を背景にする政治とロマンチズムの物語
川上一派演目	両美人	『都新聞』、『東京朝日新聞』 1897年11月5日	民野魁 民野れん 武田少尉	原作を下敷きに、高尚な脚色、旧劇にかぶれない
商務版小説	血蓑衣	商務印書館 1906年6月	鳴野魁、鳴野蓮、武田永	忠実な翻訳
静間一派演目略筋	両美人	『京都市出新聞』1908年5月	原田、建部よし子、町田勇	五幕。別の作品と継ぎ合わせた翻案
任天知進化団演目	俠女伝	『太平洋報』の挿絵1912年4月	張徳魁、張雅蓮、林堯成	別名は「俠女鑑」「都督夢」
新劇演目略筋	血蓑衣	『新劇雑誌』 1914年5月	鳴野魁、鳴野蓮、武田永	原著に忠実、民鳴社によって上演
新劇演目脚本	美人剣	『小説月報』 1917年2月～3月	郝南爾、郝蘊璉、武振章	七幕。模倣作で時代の推移が反映されるが、筋の展開が同じ、上演記録が残っていない
新劇演目略筋	血蓑衣	『新劇考証百齣』1919年4月	馬人龍、馬蓮娘、武廷璧	七幕。人物名以外はほぼ原作の粗筋、春柳社にても上演
新劇演目脚本	血蓑衣	『伝統劇目彙編・通俗話劇』第五集1959年2月	張野奎、張野蓮、武田永	八幕。武太虚口述。人物名、地名、時代背景が悉く中国化



図5 新新舞台・進化団舞台
スケッチ2
(『太平洋報』1912年4月17日)

進化団成立後、一九一一年二月八日に南京・昇平戲院での旗揚げ公演、一九一二年四月からの新新舞台での上演に『血蓑衣』が何回か上演されている。『鬼土官』に続いて、四月一七日の『太平洋報』に李叔同の手による『俠女伝』（『血蓑衣』の別名、図5）が掲載された。

配役は黄喃喃の張徳魁、任天知の林堯成、陳大悲（一八八七～一九四四）の張雅蓮となっている。上記の表から分かるが、『伝統劇目彙編』掲載のものに近い。つまり、日本の明治時代の物語を辛亥革命後の政治情勢に置き換え、完全に中国のものに翻案している。革命や政治と深くかわる進化団の性格を表している。「社会性・思想性と、家族愛や波瀾の人生を描く通俗性・ロマンチズム、この二つの共存に面白さを感じるのは日本人ばかりではなかった」と指摘されるように、『鬼土官』と『両美人』はちょうど「革命・戦争＋ロマンズ」という当時の新演劇が繰り返し取り上げていたテーマを体現している。⁽³⁸⁾

三、任天知と日本の新演劇のつながり

以上の検討から、進化団のレパトリー『尚武鑑』は小説『鬼土官』からの脚色であり、京都静間一派の『鬼中佐』とは別個の作品であること、そして『血蓑衣』は小説『両美人』の脚色で、静間一派『両美人』とは大差があることが分かる。

しかし、あえて推論を進めてみる。一九〇八年五月に王鐘声と任天知が共演した『迦茵小伝』を観た徐半梅（一八八一—一九五八）⁵⁹は、『王鐘声はいつも男役を演じていたが、今回は、突然女形になって、その相手役を演じたのは任天知だったが、こちらの方が王鐘声より芝居が上手なため、『迦茵小伝』で多くの応援をもらった。（中略）多分彼は台湾にいた時、日本の新派劇を多く観たのだろう。私は彼の演技を見て分かるのだ』⁶⁰と回想している。新派としては、川上音二郎が二回渡台している。一回目は一九〇二年十一月のことである。『オセロ』を翻案して、ベニスを東京とし、孤島を台湾列島の吉貝島に設定しているが、上演に備えて、舞台装置を調達するため行ったのである。二回目は一九一一年五月一日から六月五日にかけてのこと、台湾各地を巡業して『巴里の仇討』、『椿姫』などを上演した。⁶¹無論、川上一派以外に、ドサ回りの新派劇団の上演があったはずだが、任天知は演劇活動を始める前に京都に長く滞在しその演劇に目覚めた時期は日中間を往復する時期と重なり、台湾で新劇を観たというより、むしろ京都で観たという本論の考証のほうが正確で

あろうと考える。

任天知は「言論派老生」（言論に長じる男役）と評され、その演技の最大の特徴もやはり「化粧演説」である。例えば『黄金赤血』に、任天知の演じる役の台詞は他の人物より何倍も長いうえ、エンディングに演劇と関係のない座長が登場して、

今日の演劇で得たチケット代金は全部軍隊の俸給に当てます。（中略）調梅先生のお名前は老若男女が誰でも知っています。（中略）今日は調梅先生に先ず演説をしていただいて、それから芝居を続けようと思いますが、皆様は賛成しますか。

と言って、それから

〔観客が拍手して賛成する。〕

〔梅妻、小梅がこれ聞いて舞台に注目する。〕

〔調梅が登場して演説する。〕

〔芝居が始まり、愛児が登場して悲しい芝居を演じる。観客が泣いてお金を投げる。〕

〔梅妻、小梅がつらい場面を観ると、花籠、新聞を舞台に投げて、頭を抱いて泣く。〕

〔調梅が登場して演説する。〕

〔劇が終る。〕⁽⁶²⁾

革命前後の政治的高揚の中で、このような演説と演劇のコンビが歓迎されていた。任天知が京都に滞在していた時期の新派は、壮士芝居の時代から本郷座時代にシフトし、芸が成熟してきていたとはいえ、演劇の中で演説を盛り込むケースは珍しくなかった。とりわけ、日露戦争期に、例えば一九〇四年二月の明治座公演『日露戦争号外』において、「川上・藤澤両優は入洛の上直に明治座へ乗込みて両優は戦地視察目的を舞台で演説して喝采を博した。」〔大阪朝日新聞〕一九〇四年二月二十九日）また、翌月二〇日から上演される『日露戦争』においても、「静間は一昨朝帰京したので昨夜から毎夜幕間に戦況を演るさうだ」〔大阪朝日新聞〕一九〇四年四月二日）と記されている。演劇以外に、二〇世紀初頭も政談演説が盛んだった時期であり、一年中各劇場において種々の団体が政談演説大会を開いていた。「政談演説も京都が盛んであった。都は東へ移ったが、この国の新しい文化は京から始まるといっているようで興味深い」と言われるとおり、『近代歌舞伎年表・京都篇』（国立劇場近代歌舞伎年表編集室編、八木書店、一九八六年）を開いてみると政談演説会が頻繁に行われていたと分かる。一九〇二年七月を例にすれば以下の表のようになる。

7月7日	千本座	政談演説会
7月7、8日	大黒座	政談演説会
7月9日	岩上座	演説会
7月10日	南座	演説会
7月11日	島原座	政治演説会
7月29日	夷谷座	演説会

彼は京都に在る間に新演劇、或は演説会に遭遇して、その蓄積が春柳社の上演を観て初めて本格的に活動を始めるようになった時に役立ったのであろう。

日本の新演劇から、任天知がどのような影響を受けたかについてもう少し考えてみよう。同じく新劇の創始者だった欧陽予倩（一八八九―一九六二）⁽⁶⁴⁾は東京で春柳社の『椿姫』を観て「演劇にはこういう方法があるんだ」⁽⁶⁵⁾と感嘆して入社した。そして、欧陽の回想では、春柳社の『熱涙』を観てその数日間に同盟会に入会した人が四〇人を超え、多くはこの劇に感動して入ったと言われた。⁽⁶⁶⁾ 欧陽予倩はその後、春柳社の中心人物として活躍し、演劇に一生の精力を傾けた。彼は新演劇のやり方、その芸術に目覚めたといえるのに対し、任天知はむしろ新演劇を用いて革命を呼びかける方法を見つけたのではないか。欧陽予倩、陸鏡若（一八八五―一九一五）⁽⁶⁷⁾などの春柳社社員と異なり、任は京都に長らく滞在していたにもかかわらず、意識的に新派の演目を翻案したり、新派の舞台を中国に持ち帰ろうとはしなかったことが前記の考証でも窺える。

更に補足すると、『血蓑衣』は任天知進化団のレパートリーとして知られているが、遡ってみると、一九一〇年一〇月六―七日に王鐘声がすでに北京・天楽園の舞台に出している。⁽⁸⁾それはおそらくこの演目の初演である。すでにふれたように、一九一〇年―一九一一年後半、任天知は北京で王鐘声の演劇を観たので、『血蓑衣』も観たはずである。王鐘声が一九一〇年、北京天楽園で上演した演目の多く――『縁外縁』（『新茶花』）、『血蓑衣』、『血涙碑』、『恨海』――は進化団によって受け継がれている。両者とも「革命のための演劇」に携わる代表的な人物で、王鐘声は一九一一年に辛亥革命に参加する中で、袁世凱に逮捕・処刑されたが、演目から両者の連続性はつきりしている。進化団の代表作の中で辛亥革命の経過をリアルに描いた『共和万歳』と『新黄鶴楼』は冷泉亭長・許伏民の作品で、『血蓑衣』、『恨海』などメロドラマの要素を盛り込んだ演目は王鐘声から受け継いでいることから、任天知は演劇をするが、脚本の創作に力を入れなかったように見える。

おわりにかえて――進化団の短命と静間一派の隆盛

本稿では、まず中国新劇界で大きな足跡を残した任天知の日本の経歴を明らかにした。彼が中国語教師として長らく京都に滞在して、そして当時の高揚するナショナリズムに触発された様子が浮かび上がってきたと思う。また、任天知が引率する進化団のレパート

リーの『尚武鑑』と『血蓑衣』はともに日本語作品からの翻案で、しかも静間小次郎一派の『鬼中佐』、『両美人』とは共通する演目であるという意見に対し、果たして両者は同一演目であるかどうか、そのつながりを探るため、同時代の京都でもてはやされた静間小次郎一派の新演劇にも目を向け、二組の作品を比較してみた。そこで、それぞれ別個の作品だ、という結論を得た。勿論、この結果をもって、京都の新演劇は任天知に何の影響も与えなかったと言い切ることはできないだろう。資料の制限で、推論に止まるが、後に革命演説を織り交ぜた演劇を取り上げ、華々しい活躍をした任天知にとって、京都で接した時代風潮及び新演劇は大きな原動力となり、また推進力にもなっていたのではないだろうか。

しかし、進化団は二年足らずで解散した。その原因はやはり任天知の演劇人としての姿勢にあると思われる。『戯雑誌』・「任天知軼事」に「俺は好男子なるゆえ、平々凡々として劇場に埋もれてたまるものか。一旦立身出世したら幸せが尽きない。俺は決してほらを吹く人間じゃない。大統領になる可能性が確実にある。将来大統領の位に就いたら必ず今日ここに集まる陳、蔡諸君と財産を共にする」⁽⁹⁾と彼が話したというエピソードがある。逸話なので信憑性は低いとはいえ、彼の思いの一面を窺うことはできる。事実、「任天知は契約を結んだ後、態度がガラリと変わった。以前は劇団の事務をすべて自ら取り組んでいたが、ここに至ると口出しをせず、すべて

他人に任せた。彼自身は終日妓院に遊びふけて、まもなく阿片中毒にもなった。汪優遊、顧無為らがよく勧告したが、頑迷で一向に悟らず、聞き流して、更には彼等と付き合わなくなった。⁽¹⁹⁾

一九一二年七月に組織された新劇俱進会において、任天知は演劇主任に推薦されたが「生涯第二位にならないと誓い、下位に甘んずることはできない⁽²⁰⁾」と突然辞表を出したという。つまり、「今年「一九一二」の新劇事業の大失敗は新新舞台の進化団の事例がもっとも悲惨である。進化団が新新舞台で失敗した原因は複雑で、団員の過ちではないが主任「任天知」のうぬぼれが強すぎるのが実に大きな病根である。他に背景がよくない、脚本が適当ではない、俳優のこまかし、練習が足りないなど皆失敗の主な原因である⁽²¹⁾」と評されるように、彼のうぬぼれと自己過信が進化団を崩壊させた主要因であろう。進化団の解散後、任天知はしばらく各地を転々とした後、一九一四年前後に再び上海に戻って、民鳴社に参加し、その後は啓民社、開明社、民興社へと移っていたが、その後の消息については不明である。「任天知は有志の士であるが、政治的な情熱があっても、政治的に鍛えられてはおらず、正確な理論指導を受けていない。ただ一つの理想を持っていてもそれは比較的に抽象的である。(中略)天知は演劇が好きだが、演劇にあまり精通しておらず、演劇運動を一生の事業にする決心もないようで、途中で退いた⁽²²⁾」。彼はのちに演劇の分野で活躍し続けた欧陽予倩らと異なり、そもそも演劇人と

しての自覚がどれほどあったかが不明で、演劇人というより、演劇をうまく利用した活動家という指摘が妥当であろう。

これとは好対照に、新派俳優の多くも壮士からの素人上がりで、しかし、静間一派の時代は初期の新派のように演劇を自由民権思想の宣伝、社会教育のためと喧伝する必要がなくなり、比較的成熟した演劇環境の中で、徐々に軌道に乗っていくことができた。

御存の通りの当地同じ三府の内でも隠居処と申されて、総体土地の方々は極く質素なおやさしい方々で、従って他府の人々より御氣質も違ふ様に思はれます。さすがは隠居処と申される文けあつて、御隠居連も沢山おありなされます。夫れ故演劇も一つの娛樂的に出来上つたものと思召ますから、(中略)御当地の習慣それを急激に改善実行すれば、却て看客の意に逆ふ傾きがあり。(中略)イザ愈々改善を実行するにあたつて、大に躊躇致しましたけれども、玉みがかざれば光りを放たず、当て砕けよの諺も御座いますから、若し失敗に終らば再び東京へ逆戻りの決心にて座主とも協議の上、昔日の悪習慣を打ち破り⁽²³⁾

と静間が言っている。彼は京都人の観劇好みをよく把握しながら演劇の改良にも配慮を配っている。新派の上昇期に俳優たちの贅沢ぶりを見て「嗚呼、贅沢になったものだ。実に三日見ぬ間の桜だ

な、併し今の栄華は芦生が夢にはあらざる乎、今の驕侈が新派劇の将来に於ける運命をトする辻占には在らざる乎」と嘆いて、自らはずっと節度のある生活をしていた。新派の方は日がなお浅くて根底が薄弱なので、俳優として厳しく自律しないといけないという考えを常に持っていたから、京都で一〇年以上の静間時代を築き上げることができたのである。

付録 一九〇二〜一九一〇年の静間小次郎明治座興行年表

『近代歌舞伎年表・京都篇』（国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編、八木書店、一九八六年）に基づいて整理した。

一九〇二年（明治三十五年）

上演時間	演目
1月27日〜2月11日	奇々怪々（三宅青軒作）、八重樫（なにかし君、日出連載）
2月15日〜3月6日	冤罪淵（五幕）、雪中の行軍、生首正太郎（二幕）
3月13日〜4月1日	片男波（七幕）、颯鼠御殿（三幕、中川霞城作、日出連載）
4月8日〜25日	二筋道、魔窟
4月30日〜5月21日	国秘密（全五幕）、江戸紫比翼紋日 鈴ヶ森の場 間一髪（全三幕）
5月27日〜6月10日	思ひきや（五幕、当る的（二三矢）
6月14日〜7月2日	鬼百合（七輪）、国の華（三卷）

7月13日〜8月3日 29、30日休業	闇の梅（六幕）、北京籠城（四段返し）
8月8日〜23日	地獄池（八幕）
8月31日〜9月17日	天の網、狂駒
9月21日〜10月6日	恋と恋（六幕、一盃酒（三幕）
歌舞伎座	
10月13日〜28日	紅玻璃（五幕、無慈悲（三幕）
11月1日〜12日	寒牡丹（五幕、隣の女（三幕）

一九〇三年（明治三十六年）

1月22日〜2月15日	袖時雨（大阪朝日新聞）、江戸桜
2月21日〜3月9日	こころの闇、阪本龍馬
3月14日〜4月3日	星月夜、鉄腸
4月8日〜23日	金が敵
4月30日〜5月20日	欲と欲、昔気質（『金貸と武士』文芸倶楽部）
6月30日〜7月20日	燈明台（六幕、人情（上下）
8月3日〜18日	恋慕流し（五幕、久米八六名女優を招聘）
8月31日〜9月16日	蝶と蜂、露の玉
9月20日〜10月6日	朧月夜（五幕、新社会（三幕）
10月11日〜26日	小夜嵐（五幕、江見水陰作）、鬼奴（上下二幕）
10月31日〜11月19日	毒芙蓉（小栗風葉『黒装束』、朝日の露（戦争もの）
11月22日〜23日	知恵娘、舌切雀

一九〇四年（明治三十七年）

12月31日〜1月19日	昼の部 愛と心（上中下）、夜の部 雪の曙
--------------	----------------------

1月28日～2月15日	乳姉妹（五幕）
2月27日～3月15日	日露戦争号外、お伽芝居夷三郎
3月20日～4月7日	日露戦争（四幕）
4月14日～5月30日	戦雲余滴（五幕）
5月8日～26日	鬼中佐（五幕、山口霧汀脚色）
5月31日～6月18日	名誉乃三八（五幕）
6月23日～7月9日	敵見方（五幕）
7月14日～8月1日	軍国の華（五幕）
8月6日～25日	梅千一ツ
9月1日～19日	栄華の塵、軍使
9月21日～25日	大和武士（皇軍戦死者弔慰劇）
10月1日～7日	ハムレット（九場、浮かれ胡弓（五場）
10月11日～25日	千軒長者（水谷不倒原作）
10月31日～11月18日	武装の少年（並木萍水作）

一九〇五年（明治三十八年）

1月10日～19日	天の祐（五幕）、旅順口（五幕）
1月20日～22日（興行追加）	旅順陥落祝捷劇、天の祐、旅順の開城
2月1日～16日	秘密の使者、エルナニー（ユーゴー原作、並木萍水脚色）
2月23日～3月21日	己が罪
3月30日～4月15日	長恨（五幕、大江素天作、並木萍水脚色）
4月23日～5月9日	ロメオ エンド ジュリエット、浮薔薇、胡蝶の舞

5月14日～26日	かち軍（全五幕）
5月31日～6月16日	殺人罪（全五幕）
8月6日～22日	ふた心（坪内先生著）
9月6日～24日	想夫憐（五幕、黒法師原作）
10月1日～19日	不如帰（五幕）
10月27日～11月15日	愛と罪（『夏子』）
11月22日～12月7日	銀嵐（高安月郊作）、改良奥様（並木萍水作）
12月17日～21日	鶴ヶ岡社前兜あらため（余興）、忠臣蔵（当世）

一九〇六年（明治三十九年）

12月31日～1月18日	初日出（五幕）、侠男児（五幕）
1月25日～2月15日	伯爵夫人（七幕、田口原作、並木萍水脚色）
2月22日～3月12日	魔風恋風（小杉天外作）
3月17日～23日	モンナワンナ（三幕）、喜劇 玉手箱（二幕）
3月30日～4月15日	縁不縁（五幕、小杉天外原作、並木萍水脚色）
4月22日～5月16日	雪の花
6月2日～17日	人の罪（九場）、レイズの最後（三場）、五千哩鉄道競争（五場）
6月24日～7月10日	恋か情か（五場、長田秋濤）、博士の家、七条（山田桂華）
7月14日～28日	母の心（柳川春葉原作）
9月21日～10月7日	玉の輿（五幕）、ベニス商人 法廷の場
10月11日～27日	金色夜叉（五幕）

11月1日～18日	筆子（五幕、菊池幽芳）
11月23日～12月9日	当世女（六幕、村上浪六作、並木萍水脚色）
12月14日～23日	新編菅原伝授手習鑑（二幕）、新野崎村

一九〇七年（明治四〇年）	
12月31日～1月25日	恋の蓄音機（五幕、長田秋濤原作） 吉丁字（五幕、渡辺霞亭原作）
1月31日～2月22日	仇と仇（五幕、広津柳浪、余興 所作事）
2月28日～3月25日	嫁ヶ淵（五幕、並木萍水作、伊藤桜洲脚色）
3月31日～4月20日	子煩悩（青青園作）、大和桜
4月26日～5月20日	誰が罪（六幕）
5月29日～6月23日	無花果（春雨作）、変装競争（一幕）
6月30日～7月25日	長恨歌
8月31日～9月18日	行く雲（一〇場）
9月24日～10月17日	松風村雨（五幕九場、黒法師原作、並木萍水脚色）
10月23日～11月11日	三人娘（四幕九場、『リア王』を骨子に脚色）
11月14日～25日	琵琶歌（五幕一二場、大倉桃郎作）
11月30日～12月19日	家の人（米光閨月原作、毎日懸賞当選小説）

一九〇八（明治四一年）	
1月1日～22日	当りの（二幕）、月魄（七幕）
1月29日～2月15日	大農（六幕）
2月20日～3月9日	夕雲（五幕、並木萍水脚色）

3月15日～4月5日	女夫波（五幕、田口掬汀原作）
4月12日～5月2日	寒潮（五幕、並木萍水脚色）
5月7日～24日	朝猿（五幕、霞亭原作、並木萍水脚色）
5月31日～6月17日	両美人（五幕、村井弦斎原作）
6月23日～7月9日	新朝顔（五幕、伊原青青園作）
8月31日～9月16日	金波銀波（五幕、ゲーテ原作）
9月30日～10月15日	木曾義仲（五場、江見水陰原作） 紫海苔（六場、江見水陰原作）
9月19日～25日	己ヶ罪（五幕）
11月1日～16日	やどり木（五幕、柳川春葉著）
11月30日～12月20日	縁の糸（六幕、伊原青青園原作）
12月22日～24日	室の梅（四幕）、紙屑籠（三幕）

一九〇九（明治四二年）	
1月1日～2月3日	雪の夜（一二場、ロードリットン原作）
2月1日～21日	艶物語（一一場、泉鏡花原作）
4月1日～18日	俠艶録（七幕、佐藤紅緑作）
5月1日～19日	吉原雀（一六場、並木萍水・岩崎舜花脚色）
6月30日～7月18日	雲の峰（五幕、並木萍水作）
7月23日～8月3日	猛火（三幕、田口掬汀原作）、人命犯（上下）
9月11日～10月1日	無花果（六幕、中村春雨原作）、切られお富
10月10日～24日	潮（佐藤紅緑作）

註

(1) 話劇は科白劇であり、日本語の新劇、近代劇とはほぼ共通の概念である。「近代劇」は一九世紀末から二〇世紀初頭のイブセンなどに代表される演劇を起点とし、「近代戯曲」の上演によって舞台に創造されたリアリズムの演劇（河竹登志夫『近代演劇の展開』日本放送出版協会、一九八二年、二七頁）であり、「近代の理念や精神を最も純粹に反映した演劇」（瀬戸宏『中国話劇成立史研究』「近代劇とは何か」東方書店、二〇〇五年、四二一頁）である。

(2) 厳密に言えば、文明戯は主に五四新文化運動までの間に商業演劇の形を取っていた春柳社、新民社などの活動を指すが、早期話劇は広く話劇成立（一九二四年）までの近代劇運動を指している。本論では「文明戯」と「新劇」を同じ意味で用いている。

(3) 春柳社は一九〇六年に李叔同ら留学生により組織された。東京で『椿姫』（一九〇七年二月、中華キリスト教青年会）、『アンクルトムの小屋』（一九〇七年六月、本郷座）、『トスカ』（一九〇九年三月、東京座）などを上演した。東京時代の「春柳社文芸研究会」を前期、一九一一年以降の上海「新劇同志会」を後期とすると、一〇年近くの活動を展開したことになる。

(4) 新派は旧派の歌舞伎に対する呼称であり、草創期には壮士芝居、書生芝居、新演劇、新劇、正劇などとも呼ばれたが、新派の語が定着し始めたのは明治三〇年代以降のことである。角藤定憲の壮士芝居（一八八八年、大阪新町座）、川上音二郎の書生芝居（一八九一年、大阪卯の日座）をその始まりとし、後に日清戦争劇ブームを起こし、一九〇八年ごろ家庭劇に

よって本郷座の興隆期を向かえ、その後も消長起伏を経て、現在なお劇団新派によって受け継がれ活動し続けている。新派は西洋のリアリズム演劇を取り入れて新しい演劇を創造するのを目標としつつも、歌舞伎の芸に依存しないと出発できない矛盾を最初から抱えていたので、その芸も伝統と近代の折衷に立脚し多様な表現を呈した。無論、新派は時代の経過につれ「新派」という言葉では括れない新しい動向（新劇運動に参加したり）も見せたが、本論文では主に本郷座時代を築き上げた新派に着目して論述を展開する。

(5) 新派脚本に対する文明戯の翻案と受容に関する研究には、飯塚容「『ラ・トスカ』『熱血』『熱涙』——日中両国における『トスカ』受容」（『中央大学文学部紀要』一五二号、一九九四年三月）、『空谷蘭』をめぐる……黒岩涙香『野の花』の変容」（『中央大学文学部紀要』八一号、一九九八年三月）、『血蓑衣』をめぐる……村井弦斎『両美人』の変容」（『中央大学文学部紀要』八五号、二〇〇〇年二月）、『文明戯『ナポレオン』の周辺』（『中央大学文学部紀要』九三号、二〇〇四年三月）、『もうひとつの『姉妹花』……『ドラ・ゾーン（谷間の姫百合）』の変容』（『中央大学紀要』言語・文学・文化、一〇一号、二〇〇八年二月）及び拙論『「不如帰」と『家庭恩怨記』——そのメロドラマ的性格をめぐる』（『文明戯研究の現在』東方書店、二〇〇九年二月）、『椿姫』、『茶花女』、『新茶花』——日中における演劇『椿姫』の上演とその意味』（『演劇博物館グローバルCOE紀要』演劇映像学二〇〇九、二〇一〇年三月）等がある。

(6) 瀬戸宏前掲書『進化団と文明戯の確立』、七六頁

(7) 『民立報』・『進化団人物誌』（一九二一年八月五日）には「任文毅は

四十一歳である」と書かれている。なお、この記事は桑兵「天地人生大舞台——京劇名伶田際雲與清季的維新革命」(『學術月刊』第三八卷五月号、二〇〇六年五月)において言及された。

(8) 日本人の研究には濱一衛「春柳社の黒奴 天録について」(『日本中国学会報』第五輯一九五三年三月)、中村忠行「春柳社逸史稿」(『天理大学学報』第二二・二三卷一九五六年二月、一九五七年三月)、瀬戸宏前掲書などがあり、中国側の研究には陳白塵・董健主編『中国現代戲劇史稿』(中国戲劇出版社、一九八九年)、葛一虹主編『中国話劇通史』(文化芸術出版社、一九九七年)、黄愛華『中国早期話劇和日本』(岳麓書社、二〇〇一年)などがある。

(9) 本論に挙げている中国語資料はすべて筆者の翻訳によるものである。日本語資料の引用は旧字体を新字体に改め、ルビを省略した。句読点のない場合は適宜付した。下線、「」をつけた部分は筆者による注釈である。

(10) 姜緯堂「彭翼仲案」真相「首都師範大学学報」一一二期、一九九六年五月、王鳳霞「早期話劇：從革命戲到商業劇の艱難邁進——任天知辛亥、壬子年戲劇活動新考」『浙江芸術職業学院学報』第七卷第二号、二〇〇九年六月

(11) 原本は一九一三年に、彭翼仲口述、誠厚庵記録。一九九六年に、姜緯堂の校注を経て、『維新志士愛国報人彭翼仲』として大連出版社から刊行された。

(12) 彭翼仲、名は詒孫、号は翼仲、別号は子嘉。江蘇蘇州の高官の家に生れた。科擧を受け、官職にも付いたが、義和団事件後、官職を放棄して、新聞業に取り組んだ。社会改良と民衆啓蒙を主旨として、一九〇二年

六月に『啓蒙画報』、一九〇四年八月一六日に『京話日報』、一九〇四年二月七日に『中華報』という三つの新聞を創刊した。影響が大きかったのは『京話日報』であるが、一九〇六年九月二九日に「政治を妄言、デマを捏造、匪党に追隨、勝手な議論」という理由で清朝政府によって閉鎖させられ、彭翼仲は一〇年間新疆に流刑された。その後もまた復刊と発禁を繰り返したが、一九三二年に最終的に廃刊した。(方漢奇『中国近代報刊史』(上)、山西人民出版社、一九八一年)

(13) 前掲『維新志士愛国報人彭翼仲』、一二〇頁

(14) 黄愛華前掲書

(15) 旧幕府の最高学府であった昌平坂学問所を改組した国学・漢学の教育を行なう学校を「本校」に、開成学校(洋書調所)と医学校という洋学を教授する二つの学校をあわせた総合的な高等教育機関である。なお、一八七八年に専門学校の規定により改組した東京開成学校と東京医学校を合併する形で日本最初の大学——東京大学が発足した。(天野郁夫『帝国大学の時代』中央公論新社、二〇〇九年五月)

(16) 『京都府公文書』。『立命館百年史・通史』(立命館百年史編纂委員会、一九九九年三月)より引用。本稿の東方語学校に関する記述は『立命館百年史』に負うところが多い。

(17) 『法政時論』第四卷第一号、京都法政専門学校出版部、一九〇三年一一月

(18) 花岡伊之作は東方語学校清語科の専任講師であるが、陸軍通訳から台湾総督府付通訳へと転身した経歴を持つ。一九〇四年一〇月、台湾総督府の命令で、清国を漫遊した。『履歷書』立命館百年史編纂室蔵。『立命

館百年史・通史」による。）

- (19) 『日本近代教育百年史』国立教育研究所編、教育研究振興会、一九七四年

(20) 「本校開始後日尚浅きも成績頗る良好にして、殊に清語科生徒は現今六〇名に達し、教授方法は速成会話を主とし、殊に簡易なる日用会話を為すに至り、世上の好評弥々高きと、且時勢の必要に迫らる、より、近頃入学生志望者甚多きを以て、新たに一学級を加え、本月中新入学を許可す」。

(学級の増加)『法政時論』、第四卷第三号、一九〇四年一月

- (21) 『京都日出新聞』一九〇五年九月四日。

(22) 『法政時論』第五卷第六号、京都法政専門学校出版部、一九〇五年六月

(23) 『清語読本』東方語学校編纂、金港堂、前編(一九〇四年十一月)、後編(一九〇五年五月)

- (24) 前掲『彭翼仲五十年歴史』、一二〇頁

(25) 前掲欧陽予倩『自我演戯以来』

(26) 汪笑儂(一八五八―一九一八)、原名は德克金、満州族の人である。

甲午戦争前後に天津や上海で改良京劇の活動を行った。清朝政府の腐敗を諷刺し、愛国思想を宣伝する歴史劇を数多く上演した。代表演目には『哭祖廟』、『党人碑』などある。

(27) 田際雲(一八六四―一九二五)、名は瑞麟、芸名は想九霄、河北高陽の出身である。京劇の女形に長け、玉成班を組織した。皇帝に奉仕する名優で、戊戌変法前に維新派の情報を光緒皇帝に伝達する役割をしたと言われる。二〇世紀初頭に伝統劇の改良に取り組み、革命を鼓吹する王鐘声の

新劇団を北京に招へいた。

(28) 王鐘声、名は槐清、字は熙普、本籍は浙江紹興で、中国新劇の創始者である。鐘声という芸名には「革命のために呼びかける」という意味合いが込められている。ドイツと日本に留学したことがあると言われる。演劇を利用して社会教育と革命宣伝するのがその主旨である。

(29) 上海における春陽社の演劇活動については、王鳳霞「王鐘声新考」(『戲劇芸術』、二〇〇八年第六期)、北京における王鐘声の演劇活動については吉川良和「王鐘声事蹟二攷」(『一橋社会科学』二、二〇〇七年三月)が詳しい。また、鐘欣志「越界與漫遊：尋覓現代觀衆的『鐘声新劇』」(『戲劇学刊』第一四期、台北・国立台北芸術大学戲劇学院、二〇一一年)は新しい資料を補充したうえでの最新論考である。

(30) 徐半梅「話劇創始期回憶錄」中国戲劇出版社、一九五七年

(31) 瀬戸宏前掲書、四五七―四六二頁

(32) 明治二〇年代、憲法發布や国会の開設を目指す自由民権運動を背景に、自由党壮士角藤定憲(一八六七―一九〇七)と川上音二郎(一八六四―一九一八)の壮士・書生芝居が人気を集めた。三段階を経て新派は一つの演劇様式に作り上げられた。第一段階は政治演劇を中心としており、『経国美談』(一八九二年二月、堺市卯の日座、川上一座旗揚げ)、『板垣君遭難実記』(一八九一年六月、中村座、東京進出)、『佐賀暴動記』、『芸娼存廢論』などがある。第二段階は日清戦争劇を中心として、『日清戦争』(川上音二郎戦地見聞日記)『威海衛陥落』(一八九五年五月、歌舞伎座)がある。第三段階は家庭メロドラマを中心として、『滝の白糸』(泉鏡花)、『不如帰』(徳富蘆花)、『金色夜叉』(尾崎紅葉)、『己が罪』(菊池幽芳)など

がある。一九〇四年頃に新派は「本郷座時代」という興隆期を迎えた。

- (33) 前掲『申報』・「新優任文毅之歴史譚」(一九一一年八月一七日)によれば、任天知は「去年「一九一〇年」再び北京にやってきたが、ちょうど鐘声、木鐸が新劇を演じて有名になった頃であった。任はよいチャンスと思い活動に参加しようと謀ったがでなかった。そこで、監国に手紙を送って時事を議論したが、日本籍に入っているため相手にされず、快々として上海へ南下した」と書かれている。

- (34) 「名家真相録・静間小次郎」『演芸画報』一九〇八年十二月

- (35) 大笹吉雄『日本現代演劇史・明治大正篇』白水社、一九八五年、四七三―四七四頁

- (36) 同上、四七四頁

- (37) 『京都日出新聞』一九〇四年六月二日

- (38) 『京都日出新聞』一九〇四年二月一六日

- (39) 「名家真相録・静間小次郎」『演芸画報』一九〇八年二月号、五八頁

- (40) 「京都演劇改良会による劇場の等級」『京都日出新聞』一九〇二年五月二〇日

- (41) 飯塚容「血蓑衣」をめぐって——村井弦斎『両美人』の変容——『中央大学文学科紀要』八五号、二〇〇〇年二月

- (42) 『京都日出新聞』一九〇四年五月九日

- (43) 『京都日出新聞』一九〇四年五月一日

- (44) 朱双雲『初期職業話劇史料』独立出版社、一九四一年、五頁

- (45) 一部例外もある。例えば、新舞台では水、土、日に昼の部があった。

- (46) 前掲『初期職業話劇史料』、六頁

- (47) 『太平洋報』は一九二二年四月一日に創刊された。同盟会関係者が辛亥革命後に最初に発行した大型日報である。新聞社の印刷機械のすべては革命前、同盟会の秘密印刷所のもので、日常経費は新政府の要人陳其美に支給されるという。李叔同、柳亜子などの南社メンバーが文芸欄の編集責任を負っていたので、南社社員の方筆活動の拠点でもあった。

- (48) 前掲『初期職業話劇史料』、六頁

- (49) 詳しくは、前掲中村忠行「春柳社逸史稿」を参照のこと。

- (50) 前掲『初期職業話劇史料』、九頁

- (51) 川上音二郎が故郷博多に帰省中で、彼を除いた一座のメンバーが出演した。

- (52) 『時事新聞』一八九七年十一月六日

- (53) 青々園「川上座の藤澤芝居」『都新聞』一八九七年二月五日

- (54) 東帰坊「川上座劇評(上)」『東京朝日新聞』一八九七年二月五日

- (55) 『京都日出新聞』一九〇四年六月三日

- (56) 一九〇九年四月二―五日に、春柳社のメンバーが東京の高等演芸館で『血蓑衣』という名前の演目を上演したが、内容は『両美人』とは大きく異なっている。詳しくは飯塚容前掲論文を参照のこと。

- (57) 飯塚容前掲論文を参照。

- (58) 中国における「椿姫」の変容も同様である。詳しくは拙論「『椿姫』、『茶花女』、『新茶花』——日中における演劇『椿姫』の上演とその意味」(『早稲田大学演劇博物館グローバルCOE紀要 演劇映像学二〇〇九』二〇一〇年三月)を参照されたい。

(59) 徐半梅は江蘇呉県の出身、名は傅霖、号は筑岩、筆名は卓呆。日露戦争前に日本で体育を学び、一九〇五年に上海に戻った後、文明戯に携わった。道化役が得意で、脚本と小説も多数創作した。

(60) 前掲『初期職業話劇史料』二四頁

(61) 井上理恵「日本統治で生まれた川上の演劇——『台湾鬼退治』、『オセロ』、『生蕃討』」『吉備国際大学社会学部研究紀要』第一九号、二〇〇九年三月

(62) 王衛民編『中国早期話劇選』中国戯劇出版社、一九八九年三月、三〇～三一頁

(63) 井上理恵「川上音二郎の登場——明治の同時代演劇うまれる」『演劇学論集』紀要五一、二〇一〇年一〇月

(64) 欧陽予倩は湖南省瀏陽の出身で、名は立袁、号は南傑であり、芸名は連笙、蘭客など複数を使っていた。一九〇二年に日本に来て一九〇五年まで成城学校に在学し、一九〇七年に明治大学商科に入学した。この時期から春柳社に参加し、帰国後も春柳社主要メンバーの一人であった。中国早期話劇と現代話劇の創始者である。

(65) 前掲欧陽予倩『自我演戯以来』、九頁

(66) 同上、二〇頁

(67) 陸鏡若、名は輔、字は扶軒、江蘇省常州の生まれである。一九〇九年、東京帝国大学文科哲学科に入学していた。新派俳優藤沢浅二郎の俳優養成所に参加し、さらに坪内逍遙の文芸協会にも参加していた。春柳社の中心メンバーの一人であり、新劇の創始者の一人でもある。

(68) 吉川良和「王鐘声と辛亥前後の北京劇界」『多摩芸術学園紀要』第三卷、

一九七七年、四八頁。「王鐘声事蹟二攷」(『一橋社会科学』二一、二〇〇七年三月)も参照。

(69) 「任天知軼事」『戯雑誌』上海…戯社營業部、一九三二年七月

(70) 『初期職業話劇史料』「軀始職業話劇的進化団」一九四二年六月、重慶独立出版社、五頁

(71) 「新劇俱進会消息(十)」『太平洋報』一九三二年七月八日

(72) 晋僊「新劇俱進会消息・本会最近之好消息」『太平洋報』一九三二年九月二〇日

(73) 前掲『自我演戯以来』、二〇三～二〇四頁

(74) 春齋主人「静間小次郎を訪ふ」『演芸画報』一九〇七年五月号、五七頁

(75) 前掲『名家真相録・静間小次郎』、五三頁